

高校生の学級満足感と学級生活意欲に関する検討

森田 裕子

Investigation concerning sense of satisfaction with and enthusiasm for class life among high school students

Hiroko MORITA

Abstract

The objective of this research was to examine factors linked to a sense of satisfaction with and enthusiasm for class life among high school students. It was based on analysis of the responses to a questionnaire survey conducted with 760 high school students. The findings indicated significant differences in scoring for support from teachers and sense of trust in teachers among the students, who were divided into four groups in terms of degree of satisfaction with their class. The scores for these items were particularly low in the dissatisfied group, whose scores for distrust, however, were significantly higher than those of other groups. The factors related to enthusiasm for class life varied with the group. In the dissatisfied group, specific support was correlated with enthusiasm.

keywords: High school students, sense of satisfaction with class life, enthusiasm for class life

要 旨

本研究は、高校生の学級における満足感と学級生活意欲につながる要因について検討することを目的とした。高校生760名の調査回答について分析を行った結果、学級満足度の4群で、教師からのサポート、教師に対する信頼感の得点に有意差があることが示された。特に、不満足群の得点は有意に低いことが示された。しかし、「不信」については、他の群より有意に得点が高かった。また、学級生活意欲に関係する要因は、群ごとに異なるものであった。このうち不満足群では、具体的なサポートが学級生活意欲に関係していることが示された。

問題と目的

平成23年度文部科学省の調査¹⁾によれば、高等学校における不登校生徒数は56,292人、このうち不登校から中途退学に至った生徒は17,744人、全体の中途退学者数は53,937人に及ぶ。主な退学理由としては、学校生活・学業不適応38.8%、進路変更34.1%、学業不振7.0%などが挙げられている。不登校状態に陥る場合も、学校内の友人関係がうまく形成されているかということと大きく関係している²⁾。一日の大半を学級で過ごす生徒たちにとって、そこでの居心地や友人関係は、学校生活全体を左右する重要なポイントとなる。

開放的で親和的な雰囲気にはまっている学級では、自分が所属する仲間以外の学級成員とも関わり合いやすく、このような学級に所属している生徒は、同じ仲間集団に所属する特定の生徒以外の生徒からも大切にされていると感じたり、困ったときに学級内の多くの生徒が相談に乗ってくれたりする可能性が高い³⁾ことが指摘されている。また、学級からの受容感を感じる

ことで、特別活動にも積極的に参加しやすくなり、参加によって学級からの受容感が一層増すというプラスの循環的な効果が生じ、良好な友人関係の構築につながる⁴⁾という指摘もある。学級内の雰囲気は、そこでの友人関係にも大きく影響を与えるものと考えられる。同様に、よい友人関係を築ける生徒は学習に関する情報を他の生徒から得たり、困ったときにサポートを求めやすくなる⁵⁾ことも明らかにされており、学級内の雰囲気と友人関係は学習意欲にもつながる可能性が示唆されている。

友人関係に焦点を当ててみると、様々な特徴や課題があることも伺える。高校生になると、家族関係より交友関係の方が自我発達上において影響が大きく⁶⁾、学校生活上での友人関係の在り方が非常に重要となる。しかし、その一方で現状の生徒の友人関係をみる限り、信頼関係を構築していくことが難しい状況があることも否めない。青年期の友人関係は他の年代と比較して、自分が傷つくことを恐れる心性が強く、他者に対して閉鎖的になり、人からの批判や自分が傷つくことを回避するため、自分の率直な意思表明をしな

い⁷⁾。親密な関係を求めるものの、評価懸念の高さや孤立することへの不安から、表面的に合わせ強い信頼関係を構築しにくい関係性があることも考えられる。このような友人関係の中でトラブルが起こったとき、関係を修復できず不適応や不登校を引き起こしてしまうケースも少なくない⁸⁾。加えて、社会全体の価値観の変化は教育の多様化につながり、高等学校の在り方をも大きく変えてきた。その結果、学級集団の機能やそこに所属する生徒と教師との関係性にも変化が生じてきている⁴⁾。しかし、学級という集団の中で、協力し認め合える関係性を構築していく力をつけることは、学校教育の意義でもあり、その後の社会生活においても必要不可欠な力でもある。このため、学級が安心できる居場所であり、多くの友人関係を通して学び合える環境を整えることが、学校や教師の取り組むべき課題の一つと考える。

以上の点を踏まえ、本研究では高校生の学級における満足感に焦点を当て、学級生活意欲につながる要因について検討する。

方 法

調査対象と手続き

首都圏への通勤圏内の都市にある、私立普通科高等学校1校を対象とし、2009年7月18日から19日に実施した。1学年、2学年の生徒786名を対象として、ホームルームの時間を利用し、クラスごとに実施した。その際、回答したくない質問については飛ばしてもよいこと、未回答や途中で中止しても不利益が生じないことなど、倫理的配慮について、担任が説明を行った。回答数は760名（1学年396名、男子92名、女子288名；2学年390名、男子79名、女子296名）、有効回答率96.7%であった。

質問紙について

使用した質問紙は1) 教師サポート尺度、2) 生徒の教師に対する信頼感尺度 (Students' Trust in Teachers ; STT 尺度)、3) 学級満足度尺度、4) 学級集団帰属意識尺度である。本研究では、このうち前回分析を行っていない学級満足度尺度を用いて新たに分析を行うものとする。なお、既に発表済みの因子分析結果については APPENDIX に示す。

(1) 学級満足度尺度

学級満足度尺度^{9) 10)}とは、児童生徒の学級生活における満足感に関する20項目と、意欲に関する20項目から構成された質問紙である。それぞれの合計得点を座標上にプロットし、その位置によって「満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「不満足群」の4群に

分類する。これにより「学級集団」「個人」「学級集団と個人」の3つの側面を同時に理解することができる。なお、意欲に関する項目は、友人関係、学習、教師、学級、進路の5つの視点で構成されており、本研究では、これらの項目を用いて分析を行うこととする。4群の特徴について以下に示す。

学級生活満足群（以下満足群と記す）に属する生徒は、不適応感が少なく学級生活や活動に満足し、意欲的に生活していると考えられる。非承認群に属する生徒は、不適応感やいじめ被害の可能性は低いが、学級の中で認められることが少なく、自主的に活動することが少ない、意欲の低い生徒と考えられる。侵害行為認知群に属する生徒は、自主的に活動している半面、自己中心的な面があり、他の生徒とトラブルを起こしている可能性が高くある。また、被害者意識の強い生徒も含まれる。学級生活不満足群（以下不満足群と記す）に属する生徒は、学級の中でいじめや悪ふざけを受けている可能性があり、不適応につながっていることも考えられる。学級の中で居場所を見いだせず、不登校になる可能性が高い生徒といえる。

結 果

1. 学級満足度4群の分布割合および学級生活意欲の平均値

4群の所属割合を全体でみると、満足群41.05%、非承認群31.22%、侵害行為認知群7.67%、不満足群15.88%で、全国平均値と比較すると満足群と非承認群の割合が高かった。また、侵害行為認知群と不満足群の割合が極めて低かった。学年別で見ると、1学年の方が満足群の割合が高く、学年の半数以上が満足群に位置していることが示された。一方、2学年については1学年に比べ、満足群よりも非承認群に所属する生徒が多く、二極化していることが示された。また、対象校は生徒の学級満足感が高く、不満足と感じている生徒が少ない学校であることがわかった(表1)。

次に、学級生活意欲の得点を項目別に見てみると、友人関係、教師、学級で、満足群が最も高く、続いて侵害行為認知群、非承認群、不満足群の順となっていた。学習および進路に関しては、侵害行為認知群の得点が最も高く、次いで満足群、非承認群、不満足群の順となっており、いずれの項目でも不満足群が最も低い得点を示した(表2)。

2. 学級満足度4群と各下位尺度の比較結果

学級満足度尺度の4群と教師サポート尺度、生徒の教師に対する信頼感尺度の下位尺度について、分散分析を行った。その結果、情緒的サポート ($F(3,734)$

表1. 学級満足度4群の分布割合

	全体	1学年	2学年	全国平均
満足群	305(41.05)	193(51.74)	126(34.05)	(36.00)
非承認群	232(31.22)	91(24.40)	152(41.08)	(23.00)
侵害行為認知群	57(7.67)	36(9.65)	23(6.21)	(15.00)
不満足群	118(15.88)	53(14.21)	69(18.65)	(26.00)
	N=743	N=373	N=370	(%)

表2. 学級生活意欲平均値とSDの結果

		満足群	非承認群	侵害行為 認知群	不満足群	全国 平均値
友人関係	平均値	18.60	16.80	17.36	14.05	16.60
	SD	1.79	2.60	2.40	3.25	2.90
学習	平均値	14.55	11.94	14.84	11.86	12.50
	SD	2.86	2.95	2.75	3.12	3.30
教師	平均値	14.62	11.54	14.43	10.81	12.30
	SD	3.45	3.08	3.38	3.68	3.60
学級	平均値	17.07	13.70	15.66	11.38	13.60
	SD	2.46	2.85	3.00	3.26	3.80
進路	平均値	14.98	12.76	15.52	12.46	14.20
	SD	3.56	3.92	3.29	4.12	3.70
総合得点	平均値	80.03	66.85	77.81	60.63	69.20
	SD	7.95	9.42	8.58	10.66	12.20

=15.81, $P < .01$)、道具的サポート ($F(3,738) = 15.08, P < .01$)、積極的サポート希求 ($F(3,739) = 21.81, P < .01$)、安心感 ($F(3,737) = 18.87, P < .01$)、不信 ($F(3,733) = 4.10, P < .01$)、正当性 ($F(3,733) = 3.35, P < .01$)、受容 ($F(3,735) = 20.63, P < .01$) のすべての下位尺度で、有意な差が認められた。LSD 検定による多重比較の結果、情緒的サポート、道具的サポート、積極的サポート希求、安心感、正当性の5つの下位尺度で、満足群と非承認群の間、満足群と不満足群の間、非承認群と侵害行為認知群の間、侵害行為認知群と不満足群の間に、それぞれ有意な差が認められた。不信では、不満足群と満足群、非承認群、侵害行為認知群の間に、それぞれ有意な差が認められた。受容では、満足群と非承認群の間、満足群と不満足群の間、非承認群と侵害行為認知群の間、非承認群と不満足群の間、侵害行為認知群と不満足群の間にそれぞれ有意な差が認められた。また、平均値の比較から、不信を除く下位尺度について、満足群と侵害行為認知群が同様に高い得点を示すのに対し、非承認群と不満足群が同様に低い得点を示していた。このことから、2群ごとに同様の得点傾向があることが示された。結果を表3に示す。

3. 学級満足度4群における学級生活意欲を規定する要因の検討

学級生活意欲に影響を与えている要因を検討するた

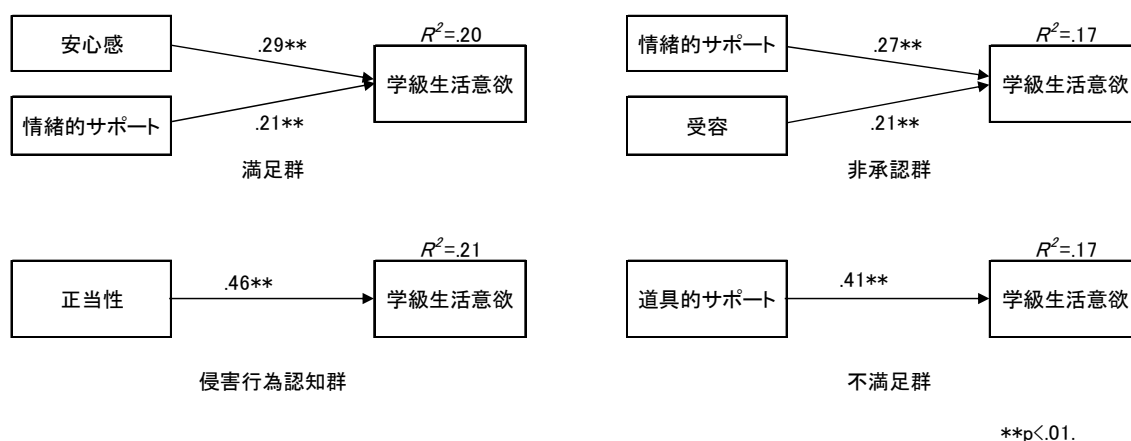
め、教師サポート尺度、生徒の教師に対する信頼感尺度の下位尺度を用いて重回帰分析を行った。その結果、満足群では、安心感と情緒的サポートが、学級生活意欲につながっていることが示された。安心感は「不安なとき先生に話を聞いてもらおうと安心する」など、相談することで得られる安心感、つまり気持ちの安定につながる内容を示すものである。また、情緒的サポートは、「落ち込んでいるときに声をかけてなぐさめてくれる」など、励ましやほめるといった自分自身を理解し認めてくれる内容を示しており、情緒的な支えが、学級生活意欲につながることを示された。また、非承認群では、情緒的サポートと受容が、学級生活意欲につながっていることが示された。非承認群では、情緒的サポートに加え、「先生は私の努力や可能性を理解してくれていると感じる」など、ありのままの自分を認め受け入れてくれることが、学級生活意欲につながっていた。侵害行為認知群では、正当性、つまり「先生はどんな指導でも自信を持って行っていると感じる」「先生は教師としてたくさんの知識を持っている」など、自身の期待と一致する教師の姿の有無が学級生活意欲に関係していることが示された。不満足群では、道具的サポートが学級生活意欲に関係していることが示された。道具的サポートは、「自分にとって必要な情報を教えてくれる」など、わからない問題の解決方法についての指示や、具体的な手立てを求めていることが示された(図1)。

表3. 学級満足度4群と各尺度の平均値と多重比較の結果

		①満足群 (N=305)	②非承認群 (N=232)	③侵害行為認知群 (N=57)	④不満足群 (N=118)	F値
情緒的サポート	平均値	18.46	16.78	18.20	16.24	15.81***
	SD	3.33	3.92	3.77	3.99	
道具的サポート	平均値	15.68	14.19	15.31	13.81	15.08***
	SD	2.98	3.31	3.45	3.55	
積極的サポート希求	平均値	13.43	11.48	13.12	11.19	21.81***
	SD	3.30	3.34	3.63	3.60	
安心感	平均値	2.47	2.14	2.50	2.03	18.87***
	SD	0.69	0.68	0.71	0.70	
不信	平均値	2.05	2.11	2.07	2.27	4.10**
	SD	0.34	0.62	0.58	0.58	
正当性	平均値	2.93	2.74	2.94	2.64	10.30***
	SD	0.53	0.58	0.62	0.63	
受容	平均値	2.70	2.46	2.72	2.25	20.63***
	SD	0.55	0.62	0.60	0.61	

***p<.001, **p<.01.

図1. 学校生活意欲に影響を与える要因の重回帰分析結果



考察

1. 学級満足度4群の分布割合および学級生活意欲の平均値の結果から

学級満足度尺度の4群の分布割合について考察したい。まず、1学年の満足群が51.74%と、学年の半数以上が満足群に位置しており、全国平均値を大きく上回る結果であった。調査の実施時期が前期であり、高校生活への期待の高さの表れとも取れ、学級での活動が円滑に行われていることが予想できる。しかし、他者から認められていないと感じている非承認群は、全国平均を超えており、このままの状態が続けば、不満足群へと流れていくことも考えられる。非承認群に位置する生徒の対応が、課題の一つといえる。

次に、2学年を見てみると、非承認群に位置する生徒が41.08%と、全国平均を大きく超えており、満足群と非承認群とで縦型の集団になっていることがわかる。縦型集団が形成される理由の一つに、教師の指導観が影響している^{10) 11)}ことが指摘されている。つま

り、学習や運動、もしくは学級活動について、教師の期待に沿う活動ができる生徒については認められやすく、教師の期待通りに行動できない生徒は認められにくいという状況が起こりやすいということである。教師の指導観は生徒に伝わり、生徒間でも力関係となって言動に現れることがある。また、この群に位置している生徒は、学校へ登校することが楽しくないと感じている場合が多く、不登校や退学につながるケースが少なくない。このため、担任教師に限らず、多くの教師の眼が生徒に向いていることが重要となる。学年全体で学級経営方針や、対応について客観的で多角的な視点を持ち、具体的な指導方法について共通理解を深めていくことが必要であると考えられる。

学級生活意欲の得点のうち、学習と進路については、侵害行為認知群の得点の方が満足群よりも高い得点を示した。侵害行為認知群の特徴として、意欲的で自主的に活動できる力を持つ半面、自己中心的な面があり、周囲とのトラブルを引き起こしやすい側面がある¹¹⁾。このため、自分自身の力で対応することができ

る学習や進路に関して、高い得点を示したものと考えられる。また、非承認群では、友人関係と学級の項目で全国平均よりも高い得点であるのに対し、学習、教師、進路の項目については低く、不満足群に近い得点であった。この点からも、学習面や進路面で意欲につながりにくい要因があるものと考えられる。合わせて教師との関係性についても、詳しく検討する必要がある。

2. 学級満足度4群と各下位尺度の比較

平均値の比較から、教師サポートと、生徒の教師に対する信頼感のうち、不信を除く下位尺度で、満足群と侵害行為認知群が同様に高い得点を示すのに対し、非承認群と不満足群が同様に低い得点を示していた。この点についても、生活意欲得点と同様の傾向が認められた。つまり、学級満足群と侵害行為認知群は、教師からのサポートを肯定的に捉え、教師に対する信頼感も高いものと考えられ、必要な場面で必要な支援を活用できているものと考えられる。一方、非承認群と不満足群では、教師に対する不信感の強さが示されており、教師からの支援も少ない、もしくは本人が必要としている支援にマッチしていない可能性があり、教師に対する信頼感も低くなるといった悪循環が起りやすくなっているものと考えられる。この群に位置する生徒の現状の問題点を把握し、適切な支援を行うことが必要と考えられる。

3. 学級満足度4群における学級生活意欲を規定する要因の検討

学校生活意欲に影響する要因について比較を行ったところ、学級生活意欲にはそれぞれの群ごとに異なる要因が関係していることが示された。

満足群に所属する生徒は、基本的には学級での生活で不都合と感ずることが少なく、意欲的に楽しく過ごしている生徒群といえる。その意欲に影響を与えているのが、「安心感」と「情緒的サポート」であり、気持ちの安定につながる他者からの働きかけであった。つまり、励ましやほめてくれるなど、自分を理解し認めてくれることが、友人関係や学習意欲・進路意識をより強化することにつながっているものと考えられ、先行研究^{3) 4)}に通じる結果であった。一方、非承認群では、満足群と同様に「情緒的なサポート」に加え、ありのままの自分を受け入れてもらえる「受容」が、学級生活意欲につながっていることが示された。非承認群の特徴である承認得点の低さは、担任教師の指導観が多分に影響することは前述した通りである。他者からの承認欲求とは、自分が集団の中で価値ある存在と認められ、尊重されることを求める欲求であ

る。また、自分が誰かの役に立つことや、自分のことを信じてくれる人がいると思えることが承認欲求を満たすことにつながることを考慮しながら、担任に限らず様々な教師の視点で、生徒の長所を見出し認めることが求められるものと考えられる。また、侵害行為認知群では、「正当性」が学級生活意欲につながる要因として示された。この群では、自身の行動と比べ他者の行動に納得がいかないことで、周囲とトラブルになるという特徴がしばしば見受けられる。このため、教師の正当な判断や指導があることが、自己を肯定することにつながり、学級生活意欲に影響するものと考えられる。しかし、学習や進路といった自身の努力で成果が認められるものだけでなく、学級での他者との関わりの中で、相互理解を深めることがこの群には必要であり、そのための教師の働きかけや支援を行う必要がある。特筆すべきは、不満足群で道具的サポートのみが示された点である。これは、教師からの適切な支援が学級生活意欲へとつながることを示唆するものであり、同時に自身での解決は難しい状況にあることを示すものと考えられる。この点は、当初より不満足群に位置する生徒は、他群の生徒に比べ多様な困り感を持っている、という黒田¹³⁾の指摘に通じるものである。不満足群に位置する生徒にとって、他者との関係性や日常の学級生活での困窮度は高く、具体的な方法や手立てを必要とする切実な状況があることを示す回答とも取れる。教師はこの点を踏まえ、個別の指導・対応を適切に実施する必要がある。

4. 今後の課題

今回の結果から、学級生活意欲に関わる要因は4群でそれぞれ異なることが示された。勿論、学級生活意欲につながる要因は今回示された内容だけではない。しかし、高校生にとって友人関係を含めた学級生活意欲は、学級における満足感につながるものであり、学校生活全体に影響を与えるものといえる。その意味を十分に理解し、学級集団を構成する生徒一人一人のニーズをとらえ、様々な視点から適切な指導・援助を行うことが求められる。特に、近年教育現場で起こる様々な問題からは、子どもたちが長い学校生活を終える段階に来て、大人になれず、自分を確立しようという意識が持てていない¹²⁾現状も見えてきている。それぞれの発達段階を考慮した上で、取り組むべき課題を明確にとらえることも重要な課題である。

また、本研究では男女による比較検討を行っていない。友人関係の重要性は、男女で異なることが指摘されている。特に、女子の場合は仲間に対する心理的な関与の度合いや重要性がより大きいものと考えられる。加えて、仲間からの排斥に対する警戒から、自分

たちの仲間集団の固定的な集団志向性を強める可能性があることも指摘されている³⁾。これらを踏まえると、学級内の男女差による分析も重要であり、今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の確定値及び訂正值の公表について 2013年10月30日 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/03/1331725.htm
- 2) 吉川栄子・高橋宗 学校生活の満足感を形成する要因の検討—学校嫌い感情から見た分析— 聖泉大学 聖泉論叢 15, 207-220, 2007.
- 3) 三島浩路 高校生の仲間集団と学級適応—仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連— 中部大学現代教育学部紀要 5, 19-27, 2013.
- 4) 本多公子・井上祥治 高校生の学級集団帰属意識の構成要因が精神健康度及び学校生活適応感に及ぼす効果 岡山大学教育実践総合センター紀要 6(1), 111-118, 2006.
- 5) Wentzel, K.R. Relations between social competence and academic achievement in early adolescence. *Child Development*, 62, 1066-1078, 1991.
- 6) 長尾博 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究, 47, 141-149, 1999.
- 7) 高井範子 自己受容と生き方態度に関する検討 自己心理学研究, 1, 57-71, 2000.
- 8) 森田裕子 女子高校生の小グループの閉鎖性に関係する要因 筑波大学修士論文(未発表) 2007.
- 9) 河村茂雄 編著 グループ体験による学級育成プログラム ソーシャルスキルとエンカウンターの統合 図書文化社 2006.
- 10) 河村茂雄 編集 Q - Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 高等学校編 図書文化社 2004.
- 11) 河村茂雄・粕谷貴志・鹿島真弓・小野寺正己 編著 Q - U式学級づくり 中学校 図書文化社 2008.
- 12) 河村茂雄・藤原和政 学校適応を促進するための援助に関する研究—学校タイプ, 学校生活満足度の視点から— 学校心理学研究, 10(1), 53-62, 2010.
- 13) 黒田一寿 Q - U等を用いた1年生クラス集団の分析 平成25年度全国高専教育フォーラム 教育研究活動発表会発表資料 2013.

APPENDIX

Appendix1. 教師サポート尺度因子分析結果

項 目	I	II	III
第 I 因子 道具的サポート($\alpha = .84$)			
6.自分に必要な情報を教えてくれる	.86	-.11	-.04
7.自分の疑問に答えてくれる	.80	-.02	.02
10.わからない問題について解決の手がかりをくれる	.73	.07	-.02
9.何をすればよいか指示してくれる	.52	.21	.01
第 II 因子 情緒的サポート($\alpha = .84$)			
2.落ち込んでいるときに声をかけてなぐさめてくれる	-.18	.84	-.03
4.自分の気持ちを理解しようとしてくれる	.12	.73	-.11
12.失敗したときに励ましてくれる	.11	.72	.03
8.先生にほめられるとやる気が出る	.11	.50	.08
13.先生から受け入れられていると感じる	.12	.47	.28
第 III 因子 積極的サポート希求($\alpha = .82$)			
14.先生には自分から話しかける	-.07	-.04	.94
15.先生と良く話をする	-.06	.03	.86
16.わからないことは先生に質問する	.28	-.06	.51
因子間相関			
	I	II	
II	.72		
III	.57	.63	

Appendix2. 生徒の教師に対する信頼感尺度 (Students' Trust in Teachers : STT) 因子分析結果

項 目	I	II	III	IV
第I因子 安心感($\alpha = .93$)				
19.先生と話す気持ちが楽になることがある	.99	-.04	-.07	-.10
18.私が不安なとき、先生に話を聞いてもらえると安心する	.94	.02	.00	-.14
20.先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる	.87	-.04	.06	-.10
21.先生にならいつでも相談ができると感じる	.85	-.01	-.15	.11
22.悩んでいるとき、先生が私を支えてくれていると感じる	.82	.03	-.13	.11
28.先生と話していると、目の前が開ける思いがすることがある	.61	.03	.26	-.05
31.先生の話聞いて自分のやりたいことがわかったように思う	.43	.11	.15	.18
43.将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になる	.43	.00	.15	.23
第II因子 不信($\alpha = .89$)				
35.先生は言っていることと、やっていることに矛盾があると思う	-.04	.79	-.03	.08
32.先生に一方的に規制や考えを押しつけられていると感じる	-.15	.74	.13	.05
29.先生は一度言ったことを、ころころ変えていると感じる	.05	.73	-.07	.12
26.先生は威張っているように感じる	.10	.72	.06	-.01
44.先生の性格には裏表があるように感じる	.00	.66	.02	-.06
23.先生が間違っているときでも、先生は自分の間違いを認めないと思う	.14	.63	-.07	.01
50.先生の考え方は否定的だと思う	-.03	.63	.06	-.07
38.先生は生徒との接し方が上手くないと思う	-.03	.59	-.03	.00
52.先生は一部の人をひいきしていると思う	.03	.58	-.03	-.18
54.先生は先のことを説明してくれないので、何をすればいいのかわからない	-.06	.56	-.06	.07
第III因子 正当性($\alpha = .88$)				
33.先生はどんな指導でも自信を持って行っているように感じる	.04	.03	.82	-.23
36.先生は教師として沢山の知識を持っている	-.05	.02	.80	-.07
27.先生には教師としての威厳がある	.12	.07	.75	-.16
30.先生は真面目であると思う	-.12	-.03	.70	-.09
42.私が間違っているときは、先生ならきちんと叱ると思う	-.11	-.03	.67	-.01
39.先生は私がわかるまで熱心に指導してくれていると思う	-.05	-.05	.56	.17
24.先生には正義感が感じられる	.16	-.05	.53	.02
56.先生は頼りがいがあると感じる	.17	-.08	.48	.16
53.自分との約束や秘密を先生なら守ってくれると思う	.03	-.07	.41	.28
第IV因子 受容($\alpha = .90$)				
48.勉強や部活ができなくても先生は私を責めたりしないと思う	-.13	-.04	-.23	.83
51.先生は私の努力や可能性を理解してくれていると感じる	-.07	.12	.18	.75
45.先生は私の個性を理解してくれていると感じる	.14	.05	-.03	.71
55.私が失敗したとき、先生なら私の失敗をかばってくれると思う	.09	.05	-.15	.69
46.私は先生の前でも自然にありのままにいられる	-.01	.02	-.09	.66
49.先生はどんな生徒にも好かれていると思う	.00	-.22	.00	.53
40.先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う	.23	-.06	.06	.50
34.先生は私を大事にしてくれていると感じる	.14	.01	.22	.50
37.先生は私の意見をよく聞いていてくれると思う	.12	-.03	.25	.47
57.先生はほめたり、励ましたりしてくれる	.15	-.03	.19	.44
因子間相関				
	I	II	III	
II	-.39			
III	.70	-.51		
IV	.74	-.57	.76	